

全国家族調査の質問項目の使用頻度

松田 茂樹

I. 目的

全国家族調査（以下「NFRJ」）は、これまでにNFRJ98（1999年1月実査）とNFRJ03（2004年1月実査）の2回実施されている。これらのデータは、すでに東京大学社会科学研究所のSSJデータアーカイブに寄託されており、学会内外の研究者に広く利用されている。

現在、NFRJ08 実行委員会（実行委員長：稲葉昭英首都大学東京准教授）が組織され、3回目の調査にあたるNFRJ08（2009年1月実査予定）に向けた準備が進められている。同実行委員会の下位組織には、デザイン班、サンプリング班、調査票班、クリーニング班の4班があり、各班に割り当てられた課題を検討している。

このうち筆者が所属する調査票班（代表：嶋崎尚子早稲田大学教授）では、具体的な質問項目の検討を行っている。本稿では、調査票班の活動の一環として、NFRJ98と03を使用した論文で用いられた質問項目の頻度を分析した結果を報告する。

日本家族の時系列調査であるNFRJの基本的性格は、毎回同一の質問を行い、その変化の趨勢をとらえることにある。また、時代状況に応じた新たな質問も行い、家族とそれを取り巻く社会環境が変容する中で、新たな課題を把握するという性格も併せ持つ。この性格を踏まえると、NFRJ08の質問項目を作成するためには、次の点が検討課題となる。第一に、基本的に同一の質問を継続するとはいえ、調査票の量的制約がある中

では、NFRJ08において採用する既存質問を取捨選択する必要がある。これは、時代情勢の変化や新たな質問項目を追加する必要性からも、求められる作業である。第二に、新たな課題を把握する新規質問の作成である。無論、新規に採用された質問には、今後継続的に調査される項目も含まれる。

ここで、第一の課題に対処するためには、既存質問の妥当性や意義とともに、その活用度もみる必要がある。活用度とは、NFRJを使用した論文における既存質問の使用頻度である。活用度が低い質問は、設計当初の意義は別として、それが分析されて結果が世に公表されないという意味で、相対的に意義は低いだろう。また、その背後には、測定方法の妥当性や粗さの問題から、論文での活用が阻まれている可能性がある。このように、活用度をみることは、既存質問を再検討する手がかりを提供する。

また、本学会をあげて行っているNFRJは、学会員にとって家族研究を行うための公共財といえる。本稿は、質問の使用頻度という点から、公共財の活用のされ方を公開する意義もある。

II. 方法

1. 対象論文

分析対象とした論文は、NFRJ98と03を使用した既発表論文147本である。内訳は次のとおりである。第一は、全7巻からなるNFRJ98二次報告書に収録された論文59本である。第二は、渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』（東京大学出版会）に収録されている21本



の論文である。第三は、全2巻からなるNFRJ03二次報告書に収録された論文27本である。第四は、SSJデータアーカイブからデータの提供を受けて執筆され、本データを作成した2006年9月までに成果が報告された論文40本である。このうち、NFRJ98が使用されている論文は122本、NFRJ03が使用されている論文は32本である。なお、基礎的集計結果の報告が中心であるNFRJ98および03の第一次報告書は、分析対象から除外した。

2. データと分析方法

上記論文をもとに、1つの論文を1ケースとし、その論文において使用されたサンプルと質問項目の情報を入力した変数をそなえる個票データを作成した。1ケースには、各論文が使用した、①データ(NFRJ98,03)、②サンプル(性、年齢)、③質問項目の変数がある。いずれもダミー変数である。

分析方法は、各変数の単純集計である。サンプルの使用状況は、NFRJ98と03をプールして行う。質問項目の使用頻度の分析結果は、NFRJ98とNFRJ03別に示す。

なお、NFRJ03は学会内において利用が公開されて日が浅いため、まだ使用した論文が少ない。このため、NFRJ98の分析結果を中心に報告し、NFRJ03の使用頻度は参考値とする。NFRJ98の質問項目の使用頻度をみる際、それが使用された論文全体の5%以下にあたる、使用頻度6回以下を、本稿では相対的に使用頻度が少ない質問とする。

III. サンプルの使用状況

まず、NFRJ98と03で使用されたサンプルの特徴を述べる。男女両方のサンプルを使用した論文は119本、男性サンプルのみを使用した論文は12本、女性サンプルのみを使用した論文は16本である。多くの論文は、男女両方のサンプルを使用している。

使用された回答者本人の年齢は、39歳以下が

86.4%、40歳代が85.7%、50歳代が83.0%、60歳代以上が73.5%である。高齢サンプルの使用頻度が若干少ないものの、ほぼすべての年齢層が分析に活用されている。

IV. 変数の使用頻度

1. 本人・世帯

本人・世帯に関する質問は、大きく、本人基本属性、同居者属性、本人就業状態、収入に分けられる。これらの変数は、被説明変数と説明変数の両方として使われることが多いため、使用頻度は総じて多い。

具体的には、本人基本属性としては、性、年齢、生育地、住居形態、最終学歴があげられる。同居者属性としては、人数、続柄がある。NFRJ98と03では質問が異なり、03では世帯表形式で質問されている。

本人の就業状態の質問の使用頻度が表1である。いずれの変数も使用頻度は総じて多い。特に、就業経験、現職の従業上地位、職種、労働時間、通勤時間の使用頻度が多い。初職の職種なども、ライフコース研究などで多く使用されている。本人の就業状態の質問の中で相対的に使用頻度が少ないのは、NFRJ98にある結婚に伴う就業形態変化や子どもの誕生にともない就業形態が変化した時期を尋ねた質問(変数名「本人親なり経歴変化した時期」「本人結婚による経歴変化」)である。

本人収入、世帯収入の使用頻度も総じて多い。NFRJ03で新たに設けた家計の経済的ゆとりを主観的に尋ねた質問も多く使用されている。

NFRJは、本人と世帯の状態を尋ねる質問を多数設けている。これらの使用頻度が総じて多いことは、家族を分析する際に細かな属性情報が不可欠であることを示す。

2. 配偶者

配偶者に関する質問は、大きく、基本属性、就業状態、夫婦関係に分けられる。NFRJを使用した論文には、夫婦間のサポート関係、家事・育児分担、関係満足度を扱った研究が多い。また、配



表1 本人の就業状態の質問の使用頻度

変数名	調査票の問番号			使用回数(回)		98と03の違い
	98	03 若年	03 中高年	98	03	
本人就業経験有無	8	6	6	33	1	—
本人現職有無	8	6	6	47	11	—
本人現職従業地位	8-1	6-1	6-1	41	10	—
本人現職職種	8-2	6-2	6-2	39	7	—
本人現職規模	8-3	6-3	6-3	8	0	—
本人親なり経歴変化	19	6-4	6-4	7	1	質・カ
本人親なり経歴変化時期	19-1	—	—	6	—	—
本人結婚による経歴変化	18	—	—	6	—	—
本人現職労働日数	8-4	6-5	6-5	5	1	—
本人現職労働時間	8-5	6-6	6-6	22	4	—
本人現職通勤時間	8-6	6-7	6-7	15	2	—
本人初職時期	9(1)	—	—	10	—	—
本人初職従業地位	9(2)	—	—	9	—	—
本人初職職種	9(3)	—	—	10	—	—
本人初職規模	9(4)	—	—	7	—	—

注) 一: 該当質問なし, 質: 質問文・形式変更, カ: カテゴリー変更

偶者関係の質問は、他の変数を分析する際の説明変数としても多用されている。このため、これらの質問は総じて使用頻度は多い。

具体的には、配偶者の基本属性には、結婚経歴、結婚時期、最終学歴、就業経験、現職などがある。配偶者の就業状態は、基本的に本人と同じ質問項目である。

配偶者の基本属性と就業状態のうち使用頻度が少ないものは、現職規模(NFRJ98で3回、以下同)、労働日数(2回)、夫婦の苗字(2回)である。NFRJ98の夫婦の苗字の回答結果は、「夫方の姓」(93%)、「妻方の姓」(5%)、「夫婦で別々の姓」(0.4%)、「その他(夫婦養子など)」(0.3%)である。苗字の使用頻度が極めて少ないのは、夫方の姓以外の者が現状で極めて少なく、単純集計以外でこの質問を使用することが難しいためとみられる。苗字は子どもやきょうだいについても尋ねているが、総じて使用頻度は少なかった。

夫婦関係の質問の使用頻度は表2である。同伴行動は、夫婦一緒に夕食を食べる頻度と買い物・ショッピング(以下「買い物」)に行く頻度を尋ねているが、いずれも使用頻度が少ない。夕食の使

用頻度が少ない背景には、夕食を夫婦一緒に食べる回数が伴侶性の高さをあらわす指標であるかという妥当性のほか、回答の分散が小さいためにその差を分析することが難しいという技術的な問題がある。買い物についても、日用品の買い物であれば家事になるが、いわゆるショッピングであれば伴侶性になるという点で、両義的な質問である。

配偶者からのソーシャル・サポートを尋ねる質問は、使用頻度が多い。ソーシャル・サポートの質問は、悩み事、評価、助言の3項目の合成尺度として使用されている。一方、夫婦間の意見の食い違いを測る質問は、夫婦間の勢力関係をみるものであるが、ほとんど使用されていない。本質問が勢力関係を測定しているかという妥当性の問題もある。

家事分担の質問には、食事の用意から掃除、子どもの世話までであるが、総じて使用頻度が多い。家事の具体的な測定項目は、NFRJ98と03で大幅に入れ替えている。

夫婦生活の満足度を尋ねる一連の質問も多くの論文で使用されている。ただし、満足度の質問群



の側からも基本的には分析ができるが、これまでの分析は主に本人が子側から行われている。

4. 父母、義父母、きょうだい

父母、義父母、きょうだいについての質問の使用頻度が表 4 である。これらの使用頻度の特徴は次のとおりである。

第一に、該当者の有無、年齢、数、居住距離という基本属性の質問は、父母、義父母、きょうだいのいずれも使用頻度が高い。

第二に、父母に関わる変数の使用頻度は総じて多い。ただし、父母の就業有無の使用頻度は少ない。NFRJ の対象である本人が 28 歳以上の者では、親は無職である場合も多いことと、先述した子どもの場合と同様に就業有無のみでは詳しい就業状態が不明であることも理由である可能性がある。

第三に、基本属性を除くと、義父母ときょうだい、特にきょうだいの質問項目の使用頻度は低い。きょうだいの相互作用などが少ない背景には、この分野の研究情勢のほか、NFRJ03 では、一番目のきょうだいと金銭的な授受が発生している度数は全サンプルの 5% であり、30 万円以上の金銭の授受では 1% と少ないことも関係しているとみられる。二番目以降のきょうだいでは、それらの度数はさらに少ない。ちなみに、筆者は育児期の親を対象にきょうだいの育児支援の研究も行っている。しかし、NFRJ では、「金銭以外の援助」として尋ねているため、それが育児支援、情報提供、相談などの何であるかという相互作用の中身はわからない。

第四に、各関係において尋ねているトラブルの有無と、きょうだいの苗字の使用頻度は少ない。トラブルについては、先述したような質問的な課題があるとみられる。

これ以外に、知覚されたサポート・ネットワークを尋ねた質問 (NFRJ98: 問 30) があるが、この質問の使用頻度は高い (表割愛)。

5. 意識・心理状態

意識・心理状態の質問には、ディストレス尺度

(NFRJ98: 問 23)、ストレイン (同: 問 21)、家族意識 (同: 20) がある。

ディストレス尺度は、NFRJ98 は 16 項目、03 では 12 項目からなる尺度である。NFRJ を使用したストレス研究が盛んになされたため、この項目の使用頻度は高い (NFRJ98 で 19 回)。

ストレインは、「子どものことで悩んだこと」など 7 項目からなる。ディストレスほどではないが、ストレインの使用頻度も高い。ただし、「職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと」(4 回)、「職場や仕事上で「自分が理解されていない」と感じたこと」(1 回) の 2 項目の使用頻度は少ない。

家族意識の質問としては、NFRJ98 は 6 項目、03 は 9 項目がある。これらの項目は、大きく、①性別役割分業規範 (「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」など)、②家意識・老親扶養規範 (「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」など)、③家族形態規範 (「愛のない夫婦は離婚すべきだ」「未婚者でも、お互いに強い愛情があれば、性的な関係をもってもかまわない」) に分類できる。このうち、①と②の使用頻度は多く、特に「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という項目は NFRJ98 で 36 回使用されている。しかし、家族形態規範の 2 項目の使用頻度は相対的に低く、03 では他の項目が使用される中でこれらは使用されていない。家族形態規範の現質問が、今日の規範研究からみて妥当であるか再検討が必要かもしれない。

V. おわりに

本稿では、NFRJ98 と 03 を使用した論文で用いられた質問項目の頻度を分析した。現在、98 と 03 の結果を受けて、NFRJ08 実行委員会で新しい調査票の検討を進めている。本分析は、その作業に向けて、質問の連続性を維持しつつも、既存質問の取捨選択や改変の余地があることを示唆する。



第一に、対象が誰であれ、基本属性の質問の使用頻度は多い。これは、本人、父母、義父母、子、きょうだいの詳細な基本属性は、家族研究において不可欠であることを示す。基本属性の質問は紙面を必要とするが、今後とも、この部分には紙面を割き、詳細に尋ねることが求められよう。ここで、NFRJ03までは子どもと親については就業の有無を尋ねているものの、就業形態は不明である。彼らの就業の有無の質問を就業形態の質問に代えるなどして、属性情報を増やすことは検討課題だろう。

第二に、NFRJは、本人からみた2者間で、父、母、子、きょうだいなどとの関係を尋ねることを基本設計としている。各関係についての質問は、属性から相互作用などに至るまで原則同じ質問が繰り返されている。この設計方法は、SSMやJGSSなどわが国の主要調査にみられない特徴であり、2者関係で調べていく点は08においても踏襲されるとみられる。しかし、先の分析結果は、本人からみた2者間の関係すべてについて、同じ質問を適用することには、限界もあることが示唆された。本人からみた各対象者とのかかわりを2者関係として尋ねることと、すべての2者関係について同一の質問を行うか否かは別次元のことだろう。①2者関係すべてについて同一の形式で尋ねる質問と、②対象に応じて変える質問または対象によっては尋ねない質問、を仕分けするか否か

が検討課題とみられる。

第三に、現状では、離家した成人子と親の間でもっぱら問題となる金銭的援助や金銭以外の援助の授受などの相互作用を、本人からみた親側と子側の両方について同一質問で尋ねている(NFRJ03では中高年票のみ)。成人子と親との相互作用は、いずれの側からも分析可能であるが、現状ではもっぱら親との関係の分析が行われている。この状況を見ると、例えば、本人からみて親側との相互作用を厚く、詳細に尋ね、子側との相互作用は成人子についての質問は薄くすることも考えられる。

第四に、使用頻度が少ない質問項目の再検討があげられる。具体的には、トラブルの有無、本人との苗字の異同、夫婦間の意見の食い違い、家族形態規範、夫婦同伴行動、職場におけるストレーンがあげられる。使用頻度が低い背景には、これらの変数を質問する対象の妥当性、変数の妥当性、問題や現在の家族研究において求められている項目との乖離についての問題がある可能性がある。

最後に、本稿で行った質問の使用頻度の調査・分析を、今後も本学会で継続的に行っていくことを提案したい。これは、NFRJの成果報告であるほか、想定した質問が実際に有効に利用されているかを検証し、調査票を見直す手がかりを与えるものである。